

守り伝えるもの・1

11/14



子に当たる方をお祀りしています。
 (宮本) そうですか。初めて諏訪神社の神様の名前を知りました。今までそんなこと、考えてもいみませんでした。が、いい勉強になりました。

正月行事について

(宮本) 今号は、新年号ですので、正月行事である初詣について、詳しく教えていただけますか。また、初詣の参拜者も昔に比べると増えてきたように思います。いいことなのでしょうが、車の正月飾りも減り「短い期間で、もったいないとか。処分にかかるから」と、古き良き生活習慣等、われわれ日本人の伝統が廃れてきているようにも思います。



諏訪神社宮司 石村 聖さん

皆さん「正月に、なぜ初詣に行くのか？」など、私たちの身近な生活習慣の中で、守り伝えられてきた風習やその風習の持つ、物事の意味について考えたことはありますか。そんな思いから、諏訪神社宮司の石村聖さんに、お話を伺いましたのでご紹介します。

(宮本) 始めに石村さんは、何時から諏訪神社の宮司をされているんですか。

(石村) 私は元々、緑の三削神社の出身ですが、東京で医療関係の会社に勤めていました。平成7年に、宮総代の

方々から諏訪神社の宮司という話があり、引き受けた次第です。受けるに当たっては、10年間勤めた会社や家族の事、そして経済的な事等、悩みましたが、諏訪様が私を呼んでくれたのか、それからは、不思議な縁を感じました。それからは、この縁、出合いを大切にしたいという想いで毎日を過ごしています。

(宮本) 私は、人の縁には見えない力というか運命みたいなものを感じていますが、そういう出合いがあったんですね。失礼ですが神社によって名前とか、何か違いがあるんですか。

(石村) 例えば、お寺だったら仏様や宗派が違ふと思いますが、神社もお祀りする神様が違います。神道には、八百万の神といっているような種類の神があられます。伊勢神宮には天照大神、明治神宮には明治天皇が祀られています。どの神様が祀られているかで神社の呼び名が違います。諏訪神社では武御名方命といつて大国様で有名な大国主命の御

(石村) そうですね。正式な正月飾りをしていない家もあり見受けられなくなり、正月気分を感じにくくなっているかもしれませんね。今の時代、スピード化・情報化というか、正月も営業をしているお店もあり、利益や結果



だけを追求するあまり、日本人自体がとても「せっかち」になってしまったような気がしています。正月行事等、普段の生活との違い、めりはりのある生活を楽しむという習慣が少なくなってきたことを寂しく思いますし、その弊害でしょうが、はじめがつけられない人が増えているような気がします。初詣は歳をとることに感謝し、家族の幸せや自己の目標達成を願い、安らかな気持ちで今年一年の幸福を氏神様にお祈りするという意味があります。余談ですが、一月一日のことを「元旦」とい、国民の祝日になっていますよね。この「旦」は、地平線から日が昇るということを表しています。ですから、元旦とは、一月一日の朝のことをいいます。「一年の計は元旦にあり」という諺があるように、年の初めに祈ることに初詣の意義があり、そもそも、我々に歳をとらせてくれる「歳神様」をお迎えする行事です。です

から、お正月には、家の内外を掃除して清め、そこに歳神様を迎えるための依り代となる「門松」や「注連飾り」を門口に付け、鏡餅をお供えます。そこで用いられる橙、裏白、ゆずり葉などは、それぞれ意味があるから使われています。そのようなことは、

家の中で祖父母から子や孫へ、常識として伝えられてきた部分があったと思いますが、最近では核家族化等、社会経済情勢の変化もあり、昔からの生活習慣を教わる場がなくなってきたように思います。

そういう物事の道理を知らずに、何となく人がやっているからという人が増えていると思います。今一度、私たちの生活文化、その物事の本質を見つめてほしいと思います。

(宮本) そうですね。お話を伺い、正月行事にはより幸せに生きたいという神への切なる願いが込められていることが分かりました。私も、今年の初詣では、心から先祖へ感謝の気持ちを含め、神様に祈りたいと思います。

祈(いのち)

(石村) 人は神様や仏様に祈ることによって、心が穏やかになり、謙虚な気持ちになります。科学万能主義の今の

時代、インターネット等により情報も簡単に入手でき、何でも自分でできるよつに錯覚している方も多いよつですが、人生経験を積んでいくと自分の力だけではどうすることも出来ない事や人間を超越した存在を感じる事がありません。「人事を尽くして天命を待つ」という言葉があるように、自分でできる限りの努力をした上で、それでも結果がついてくる場合と、こない場合があると思います。時の運、場所の運、機会の運などがあるでしょうが、最後は神様、仏様の判断ではないでしょうか。

(宮本) 私も、最大限できる限りの努力をした上で、最後は心を込めて願うというか、祈ることが大切だと思います。

(石村) 私たち日本人は、色々な神様や仏様用途によって使い分けられることができるし、様々な伝統行事の中で他を認め、憎しみも、悲しみも水に流すという風習を育んできました。

日本人は、古代より神様との付き合いの中で、生活様式を形づくってきた。いわゆる礼法です。例えばこれをしたら神様はどう思うか、つまり相手を敬うことや相手の立場になった気持ちで行動すること、言い換えれば神様との対話から、正しい道を選択することが神道の精神であり、日本人の生き方だったはず。そこに生かされ

ているという謙虚な気持ちが存在し、今の自分を「よし」とする気持ちが生れます。時には他人の方が自分より輝いて見えるかもしれない、でもそれはそれで「よし」としなないと自分が次へ進めなくなると思います。

混迷する現代社会において、生きるこの意味を問い直し、なにが縁で今の自分があるのかを考えてほしいと思っています。そのことが自分の現実を冷静に見つめ、他者との協調性を生む第一歩につながっていくと信じています。

(宮本) そうですね。まずは、自己愛を取り戻し、家族や郷土を愛する心を育てないといけませんね。私も、石村宮司さんとの出会いで、多くのことを学んだような気がします。今年の初詣から、気持ちを入替え、新たな平成20年に望んでいきたいと思っています。

(文宮本正行編集委員)



守り伝えるもの



内泊地区若宮神社での秋祭り

最近では生活様式も変わり、地区を上げてのお正月行事がなくなりつつあるようですが、愛南町には、僧都地区のような山の里、内泊地区のように海の里があり、それぞれに違ったお正月の風習が残っています。今号では、守り伝えたいものとして、海の里、内泊地区のお正月の風習をお知らせしたいと



写真手前が濱田功義さん

内泊地区の船着場から、すぐ近くの家の玄関を失礼すると、何と1・25mもの大物クエの魚拓が最初に目に飛び込んできました。同地区で、永年、渡船

思います。



業をされている内泊地区の区長でもある濱田功義さん宅でのできごとです。濱田さんにお正月の過ごし方を伺うと、めでたく新年を迎えるに当たっては、玄関にしめ飾り、床の間、神棚、仏壇に鏡餅、船、神社、お寺、お地蔵さんにも、それぞれお供え物をするそうです。昔は「松竹梅を活け、それから一家の長が軒先にブリを二尾吊り下げ、おせち調理はエビやカニ類などはなく、芽赤イモと大根の煮物、ブリの刺身とキビナゴの佃煮と、至って質素なものでした」と、懐かしそくに話してくれました。

集会所で、地区の皆さんにもお聞きしましたが「凧揚げや羽根突きを始め、メンコやビー玉、段飛び、おはじきなどで遊んだもんよ」と異口同音に話され、テレビゲームに夢中の現代っ子に聞かせてやりたいお話しでした。中でも、桜や椿の丸い木で手作りしたケンカコマで遊んだ話や地区住民が一同に会し、百人一首を競い合って、顔に墨を塗りたくった話が、特に印象に残りました。

また、初めて同地区の秋祭りも見させていただきましたが、年配の皆さんが一致団結して行事をきばきとこなす姿に触れ、失いかけた人と人の絆や触れ合いの大切さを改めて感じ、とても感激する取材となりました。



昔話で楽しい一時を過ごしました。

後に、平成20年が素晴らしい年となりますよう、皆さんのご多幸、ご活躍をお祈りしています。

(文・写真、濱本秀雄編集委員)